

三水会会報

北里大学水産学部
同窓会会報
第 30 号

平成 7 年 10 月 20 日発行

編集者 大野 良樹

発行 三水会（北里大学
水産学部同窓会）

事務局 〒246 神奈川県横浜市瀬
谷区瀬谷5-22-1石井方
☎ 045-303-3135

振替口座 第一勧業銀行
大手町支店
008-1182388

水産増殖学講座教授に就任して（岩田 宗彦）

水産増殖学講座OB会設立の喜び（4F・池田 強）

“Home Coming Day in SANRIKU”に参加して（1A・尾川 道子）

阪神淡路大震災を経験して（5A・上田 俊郎）

第22回体育祭開催（体育祭実行委員会）

平成 7 年度三水会総会開催

from 会員

※水産増殖学講座OB会設立のお知らせ

水産増殖学講座OB会



Home Coming Day in SANRIKU



水産増殖学講座教授に就任して

岩田 宗彦

平成七年三月に水産増殖学講座の教授に就任いたしました。未来を担う若者との研究活動を始めるに当たり、その責任の重大さを痛感しております。

私は関西で育ちましたが、北国の豊饒な自然に想いを寄せて北海道大学で水産学を専攻しました。スケトウダラの集団遺伝学で学位を受け、北海道中央水産試験場を経て東京大学海洋研究所に移動しました。昭和五〇年からは同研究所の臨海研究センター（岩手県大槌町）に十五年間勤務し、サケの降海生態と浸透圧調節機能の研究を開始するとともに、北里大学水産学部の諸先生とも共同研究を始めました。平成元年から水産庁の養殖研究所日光支所に移動し、サケ科魚類の降河行動の制御機構の研究を続けるとともに、農林水産省の大型プロジェクト研究のサケ部門研究統括の任に当たりました。

五〇歳を過ぎたのを機に新しい研究発展の場を考え始めた頃にお誘い

を受け、強い決意を胸にホームグラウンドに戻るようになりました。研究のテーマは大槌臨海研究センター在職中に発展させた不思議なサケ・マスの回遊生態を制御するメカニズム研究を一層発展させることです。更に当講座の千葉先生が続けている若齢ウナギの性決定機構の研究も、同様に回遊という観点から考え直して研究対象に加えました。これらの研究は単にサケ・マスやウナギの回遊生態の制御を目標にするだけではなく、なぜ動物は成長や環境変化に応じて生息場を変えるのか？に答えを求めるものです。もっと大きく考えると、ヒトを含めた動物は進化の過程で移動・回遊をすることで生き延びて発展しましたが、その原動力としての動機付けはどのようになされるのかを知ることです。希望は大きいほど良いと言いますが、「大ボラ」に近い妄想を抱いています。

— 今世紀になって急速に発展したか
に見える水産養殖は、農業と比較す

ると必ずしも誇れるほどのものではないようです。その最も大きな理由は、対象とする栽培生物の性質が、農業では人工的な環境に適合させるために数百世代にわたり選抜されてきたにもかかわらず、水産養殖では例えばハマチ、ウナギ、サケ、マス、エビ、ホタテ貝、ワカメ、コンブなどの種はとつても天然種苗と変わらない野生の性質しか持っていないせん。したがって、養殖漁業の生物にとって養殖は、超高密度で更に悪い水質環境で行われていると考えられます。そこで私たちの研究の裏の目標として、動物の回遊生態がある種のストレスからの回避行動であると考えてみることで、動物にとってのストレスを解析する技術を開発することを試んでいます。ストレスには生息密度のような生物間の作用もありますし、洪水、土木工事、酸性雨、工場排水、漁場荒廃のような物理的・化学的環境変化もあります。これらのストレス源と魚類の応答を研究する

ことから、野生種の養殖環境に対する評価を知り、ストレスを小さくして最適生産に導く技術の開発を目標にしています。

本年三月に着任した日は、よりもよって春の大雪でした。十八メートルの大型トラックで実験機材を運び込んだ結果、始めて顔を合わせた新四年生と研究生諸君は雪の中を一日中荷物運びとなりました。その記念すべき日から五カ月間毎週、研究室のゴミ掃除、実験室へ衣替えするための工事、新しい行動実験装置の組立をしています。講座の諸君は、研究とはゴミ掃除と大工仕事だと諦めるようになりました。しかし、プラスチック加工、FRP成形、木工、電気配線、配管工事、水槽組立などの技術が学生諸君に伝授できました。自分たちでクーラーの取り付けもできる程で、職業訓練所のようになっています。

八月には初めて当講座に最新式の分析機械が入ります。この分析機は生体内の超微量物質を免疫反応によって定量検出する装置でDELFIAと呼びます。主にホルモン濃度を測定する目的で前任地で技術開発していました。以前は放射能を標識として使っていましたが、この機械は

蛍光を標識として利用する世界で唯一のもので。新兵器が導入できたことで放射能取り扱い者でなくても、学生諸君に技術指導することで飛躍的に研究効率を上げることができはります。

最後になりましたが、私が北里大学に来るに当たって描いた夢について一言書き添えます。「三陸の鼻曲がり鮭」と江戸の時代から食前で親しまれてきたサケが、魚道を登って三陸キャンパスに戻ってくる“川を

水産増殖学講座OB会設立の喜び

4 F 池田 強

昨夜降った雨が通りの街路樹にしみ込んだのか緑がいっそうきわだっていた。東京の緑もまんざら捨てたものではないなあ、そんな事を考えながら本郷の坂を東大農学部へ私は向かっている。増講OB会設立の最後の打合せを福代先生とする為である。最近の仕事の合間にOB会設立の事をやるのではなく、OB会設立事務の合間に仕事をやっている様なものである。会社は私に机、FAX、電話を用意し、そして時々若手社員もOB会事務局用に用意してくれて

実現したい。彼等は素晴らしい研究材料を提供してくれるでしょう。この計画は特別な構造物を要求するものではなく、現在の排水溝を整備することで実現できるものです。秋になれば元気な親ザケが魚道を駆け登って来ることを想像するだけで、北里大学に来て良かったと思っています。この楽しい夢物語で御挨拶の幕を閉じます。今後とも水産学部の発展に御支援をお願い申し上げます。

いる。会社に感謝、感謝である。でも上司にばれたら？一言「部長、青春まだやってますか？」この一言で部長は全てを理解してくれるだろう。少し、話は大幅にずれてしまっただが、ようするにこのOB会設立事務がうれしくて楽しくてしょうがないのである。私の喜びなのである。昔の友人と語らい考え、そして何かを作っていく。ともに悩み、苦しみ、そして喜び、私自身が一回り、いやどんどん大きくなっていくそんな気がして、さて福代先生の部屋につく

といつものヒゲ面の笑顔で全く二〇年近く昔の三陸の研究室と変わらぬ部屋に迎え入れてくれた。いよいよ「橋高二郎先生を囲む夕べ」のシナリオが今日出来上がるのである。

思い起こせば三年前、増講OBで福代先生の所へ遊びに行った時からOB会設立話がスタートしたのである。「えつ、橋高先生が北里を退任される」この情報の意味は、我々OBにとって酒の話ではすまされない事である。もちろん同席の福代先生の目は、あのブランクトンを検索している時のきびしい目が我々に何かを語っている。「先生、ほんじゃ、増講OB会でも作って恩師に恩返しと行きますか」酔っているせいか皆「そりゃいいぜ」という事になり我々の太った腰がもち上がったのである。

ある日の夕方、NHKニュースで名物教授退任というテーマで橋高先生がテレビに現われたのである。こりや時間が無い資金がない。でも私はあわてない。親友を信じているからである。私は英知という友を持っているのである。

ただ実践あるのみである。第一回アンケートを各増講OBに送る。ほぼ全員の協力体制がすぐに出来上

がった。これならいける。第二回アンケートとやつぎばやに葉書を出す。我々に対し各OBがよく答えてくれた。大きくなってしまった三水会の中に小ぶりでびりつと辛いOB会を我々は目ざす。そして、現在の研究室とOBのかけ橋になろう。

かくして、平成七年六月二十五日、東京学士会別館にて水産増殖講座OB会（会員約四〇〇名）が無事旗揚げされたのである。そして同時に「橋高二郎先生を囲む夕べ」が開催され、長年の橋高先生の功績をたたえOB代表より記念品が贈られ、なごやかな懇親会が開催された。外国より帰国したばかりのOB、朝、遠方よりかけつけたOB、みないい顔、顔……。しかし、我々は昔話だけで終わるOBではない。しっかりとテーマを持っているのである。現在に生きているOB会なのである。我々の目標は、会員相互の懇親、経済活動、研究の為の情報交換、学生及び卒業生の就職活動、求人活動の手助け、恩師又は会員の研究の援助等である。すなわち、一回会員となれば終身おつき合い願いたい。第二回総会も来年六月頃東京で各先生をお招きし盛大に催したいと思っていますので会員の皆様ふるって御参加

をお願い致します。また同期の方が参加されない場合でも、先輩、後輩、まったく臆する事ありませんのでぜひご参加を!! 最後に増講OB会設立にたいしたご尽力をいただいた各先生、卒業生ならびに三水会の役員の方々、北里大学水産学部事務部の方々に対し、この紙面をもって失礼ながらお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

水産増殖学講座OB会

平成七年・八年役員

会長 望月 敏之(2F)

副会長 池田 強(4F)

庶務会計 小林 洋(4F)

水口 智善(4F)



山田 和彦(4F)
事務局〒135 東京都江東区有明四丁目
ターミナルビル貨物フェリー東
京ブリッキングセンター内

北里大学水産増殖講座OB会事務局
TEL. 03-3528-0718
FAX. 03-3528-2723

“Home Coming Day in SANRIKU”に参加して

1A 尾川(旧姓木村)道子

私たちの母校、北里大学水産学部が、今年、第一期生の卒業から二〇年を迎えたのを記念して、去る七月二九、三〇日の両日、“Home Coming Day in SANRIKU”が開催されました。三五名の卒業生とその家族が三陸に集い、楽しい二日間を過ごしました。

三水会会報を通して、各地区で行われる親睦会の楽しい便りをいつもうらやましく拝見しておりましたが、このたび初めて、同窓会の催しに家族四人で参加させていただきました。昨年の秋だったでしょうか。三水会会報で、今回の三陸ツアーの案内の第一期生卒業二〇周年記念を見た時は、わが目を疑いました。なにしろ自分自身の年齢さえ曖昧にして過ぎてきましたので、卒業して二〇年も経っているとは思ってもみませんでした。驚きをあらたにしばし

感慨にひたっていたところへ、同じ一期卒の進藤万里子(旧姓・福井)さんからの誘いもあって、ぜひ一緒に行こうということになったのです。行くこと決まっただけからは、三陸への思いは日増しに強くなり、胸躍る気持ちで七月二九日の朝を迎えました。

高崎(群馬県)より、二〇年前にはもちろん開通していなかった東北・上越新幹線を乗り継ぎ、バスの発着地点の水沢江刺に到着。改札口を出たところで、いずれも子供連れの進藤さんと池田氏(1A)らと合流しました。年齢の近い子供同士はさっそく意気投合して賑やかにやっています。軽い昼食を済ませ、水沢江刺駅を出発してバスに揺られること二時間、もうそこは見慣れた三陸の景色です。きれいに舗装され立派になった道路をさらにすすむといよいよ懐かしい学舎です。当時はな

かったマリンホールではすでに、先に到着した自家用車組が、和やかに歓談していました。

スケジュール等の説明を受け、大学内、主に研究室を見学した後、マリンホール内の大講義室にて、学部長のあいさつ、次いで兄玉教授、外山事務長による大学の移り変わりおよび三陸の近況等の講演を聴きました。別の講義室では、井田教授による子供を対象にした水産学セミナーが開かれ、子供たちは、時には賑やかなやりとりをまじえながら、熱心に聞き入り、すてきなプレゼントまでもらって満足した様子でした。

夕方からは、二階学生ホールにて、先生方をはじめ大学職員の皆様、そして学生時代にたいへんお世話になったアパートの大家さんらも大勢来て下さり、懐かしい面々での立食パーティとなりました。テーブルには三陸ならではの海の幸が並び、嬉しい限りです。大皿に無造作に盛られた生うにとたくさんの焼きはたてには夫も大喜びで、何度も舌鼓を打っていたようです。楽しいゲームもありこまれ、和やかな雰囲気の中、更に親睦を深めたひとときでした。引き続き天候に恵まれた翌三〇日午前の自由行動は、浦浜の海岸で海



水浴を楽しみました。その後、宿泊先である夏虫山麓の遊・YOU亭よりさらに上った、山頂付近のバーベキューガーデンにて参加者全員での昼食、大勢で食べるお肉の味はまた格別で、子供たちも驚くほどよく食べました。

瞬く間の二日間が過ぎ、二〇年ぶりに再会できたクラスメートとの楽しい思い出を胸に、帰宅の途へつきました。

再び訪れた三陸の景色は、以前と少しも変わらず、忘れていた学生時代のさまざまな記憶を呼び戻してくれました。陽光と雨、天候の変化と共に絶えずその色を変える海。初め

て夜光虫の放つ光を見た時の感動。

清涼な大気を感じさせるそれは美しい満天の星。今回のツアーに参加して、この三陸で過ごした三年間は、何ものにも替えられない貴重な体験だったのだと、改めて確信しました。皆様とまた再会できる日を楽しみにしています。

阪神淡路大震災を経験して

5A 上田 俊郎

私の自宅は、震度七の地域の一つ「芦屋市川西町」にあります。神戸市東灘区との境に位置し、ちょうど阪神高速が横倒しになった北側になります。

一月十七日、熟睡中のその時突き上げられるような衝撃で飛び起きました。暗闇の中、一瞬閃光が走り、床の屑入れがガスレンジの上に飛び上がる、激しい縦揺れが一分近く続きました。

家具類は、ほとんど倒れ、室内は、ガラスが飛び散り、照明器具は天井からちぎれ落ち、冷蔵庫、洗濯機、オーディオ等すべて崩れ果て滅茶苦茶になっていました。

また別の部屋では、あまりの振動のため、本棚が本もろとも崩れ落ち

にしています。

最後になりましたが、楽しい企画を練って早くから準備に携わって下さった役員の皆様、いろいろお世話していただいた学生の皆様に感謝いたします。この場を借りてお礼申し上げます。

ドアが開かなくなり、中には勢い余って壁に、本棚が突き刺さり、大きな穴があいているありさまでした。また、ベランダ側の壁は、指が通るほどのX型のひびが大きく入りました。

揺れが収まったあと、急いで手近にある服を着込み、割れたガラスに注意しながら、靴とライトを探し、家具をどけながら、靴とライトを、玄関にたどり着き、ドアをあけると、エレベーターへ続く渡り廊下が、五階から一階まで落ち、大型の貯水槽が大きく壊れ、大量の水が溢れていました。

余震がこわいので、隣の一人暮らしの人を連れ、道路へ降りると、そこは爆撃された様でありさまで、ま

るで映画を見ているような、現実離れした光景でした。電柱はなぎ倒され道路は波打ち、近所の木造住宅はことごとく潰れていました。さらに数カ所火の手も上がっていました。明るくなると、多くの人々が着の着のまま、あてもなく道に出ていました。消防、救急、警察は、まったく見当たらず、動物の鳴き声も聞こえず、まるで、町から音が消えてしまったような不思議な静けさでした。

近くの潰れた家々では、まだ人が閉じ込められていましたが、人手だけではなすすべもありませんでした。後になり判りましたが、二百メートル四方で五十人以上の人が亡くなられたのです。

七時をすぎ、いったん部屋へ戻り眼鏡、財布を探しだし、近くの火災が延焼しないのを確認した後、電話もつながらないため東灘区の実家へバイクで戻ってみることにしました。途中の国道二号線は、道は波打ち電線や信号が垂れ下がり、倒壊した建物が道をふさぎ、避難する車で大渋滞を起していました。

やっとの思いで、たどり着いたところ、実家は傾いていましたがなんとか無事でした。そこでとりあえず

食料を用意し、知人を尋ねて回りました。

会社のほうも気になったのですが最初の三日間は、食料と水とガソリンの確保に手一杯でした。ようやく四日目に、会社を見にいったところビル（三宮駅前のそごう）が崩れ、立ち入り禁止でその日中には入れませんでした。その後のことは、ニュース等での報道のとおりです。

すでに震災後、半年が過ぎましたが、いまだに取り壊しが終わっていませんし、新築が始まった所はほとんどありません。交通機関も道路関係の復旧は、まだ一年以上かかり、相変わらず渋滞は解消されていません。



ん。

神戸の表玄関三宮も、私の会社を中心に修復が進んできていますが、元のようになるのは、まだ数年かかるようです。

今回の地震を経験して、大切だと感じたことは、あたりまえのことですが近所の人とのコミュニケーションと、日頃の地震に対する備えだと痛感いたしました。

私は、在学中に宮城県沖地震を経験しましたが、そのことが大変役立ちました。一番大切なことは、寝室の安全をはかる（背の高い家具は置かない、又は壁に固定する。照明器具は天井にべたづけ）、震度七ではまったく身動きができません。

非常持ち出し（水、靴、食料、お金、ライト、ラジオ、アドレス、予備の眼鏡等）を玄関（家が倒れた時でもとれる）に用意する事をおすすめいたします。

最後になりましたが、震災の折、ご援助や連絡をいただきました同窓の皆様にお礼を申し上げます。又、この震災で亡くなられた大勢の方々のご冥福と、家や仕事を失われた方々が、早く元の暮らしに戻るよう、心から祈りまして、筆を置かせて頂きます。

第二二回体育祭開催

去る五月二十七日、二十八日の二日間に渡って、第二十二回体育祭が行われました。二日間とも、天候に恵まれ、皆、活気に満ちたプレーをすることができました。

競技種目は、バレーボール、バスケットボール、ドッジボールでした。駅伝も予定されていましたが、出場希望者不足の為、中止を余儀なくされました。しかし、その他の種目は、我々実行委員が予想していた以上のエントリーがあり、競技や、賞品の準備に期待をふくらませました。

第一日目は、バレーボールと、ソフトボールの試合を準決勝まで行う予定でしたが、バレーボールの方が、早々と決着していったので、決勝まで行いました。

第二日目は、バスケットボール、ドッジボール、そしてソフトボールの決勝戦でした。前にも述べたように、多数のエントリーがあったのですが、結成されたチームのメンバーは、実にユニークで、個性派ぞろいでありました。それは、同じ屋根の

体育祭実行委員会

下で暮らすアパート仲間、部活動、研究室、そして飲み仲間といったところでしょう。競技を進行していく際にふと気付いたことですが、出場した選手の中には、一人でもチームもののメンバーとして参加したり、どの競技種目にも参加した元気な人もいました。三陸では、体育の授業がないので、部活動以外に、このような行事を通してでしか、様々な人とスポーツをする機会がありません。そのため、みんな、勝敗にはかなりこだわり、チームのメンバーを組み合わせているのではないのでしょうか。（賞品も、体育祭終了後のコンパには欠かせないものばかりですし……）いづれにしても、どのチームも熱気にあふれんばかりでした。

一方、我々体育祭実行委員は、この体育祭が、無事終了するまでトラブルの連続でした。例えば、グラウンドで行う競技の為にライン用石灰が切れていたり、試合の予定変更がうまく伝わらなかったりなど、御迷惑をかけてしまうのではないかと、冷

や汗をかいておりましたが、実行委員たちの積極的な働きのおかげで、一つ一つトラブルを解決することができました。

こうして、本年度の体育祭も、特

に目立ったケガも無く、無事終了いたしました。この行事を通して、先輩、後輩の関係が、あらゆる面で深まったのではないのでしょうか。これこそが、我々実行委員会のねらいで

あります。最後となりますが、この場をもって、体育祭を陰で支えて下さった皆様に、深く御礼申し上げたいと存じます。誠にありがとうございました。

「平成七年度三水会総会開催」

去る五月二一日（日）午前十一時より、白金校舎会議室において、平成七年度本会通常総会が開催され、本年度の事業計画、予算等が審議、決定されました。

総会は、代議員本人二三人、委任状出席十七人の計四十人の出席のもとに開催され、六年度事業報告、決算についての報告を受け、これを承認した後、会報の発行、Home Coming Day in SANRIKUの開催等

《平成七年度事業計画》

一、会報の発行

同窓生の動向、学部の実況、各種の情報等を含めとした会報を二回発行する。

二、「水産学部だより」の配布

本学水産学部の発行する「水産学部だより」を増刷し、全会員に配布する。

三、会員の現況の把握

全学同窓会と連携し、不明会員の調査等名簿情報の正確性の向上に努める。

四、同期会等の助成

同期会、講座別同窓会等卒業生の集会の費用の一部を助成する。

五、Home Coming Day in SANRIKUの開催

第一期生の卒業から二〇年目に

あたることから、三陸校舎において講演会や懇親会等を含めとする記念イベントを開催する。

六、懇談会の開催

大学、水産学部在学生との懇談会を開催し意見交換を行う。

七、学友会助成

クラブの活動費および大学祭、体育祭費用の一部を助成する。

八、就職ガイダンスの開催

各分野の卒業生による就職ガイダンスを水産学部生を対象に三陸校舎にて行なう。

九、漁船海難遺児育英会寄付

漁船海難等により親を亡くした子弟に学費の援助を行っている漁船海難遺児育英会に対し寄付を行う。

From 会員

水産増殖学講座OB会設立のお知らせ

去る6月25日、新緑の本郷学士会館において「橋高先生を囲む夕べ」が開催され、これを機に正式に「水産増殖学講座OB会」が結成、発足されました。OB会の事業としては、研究室のバックアップ、就職活動の援助、懇親会の開催等を計画しております。現在、名簿を作成しておりますので、変更等のある方はご連絡下さい。なお、役員は次のとおりです。

会長/望月 敏之(2期)、副会長/池田 強(4期)、庶務会計/小林 洋(4期)、水口 智喜(4期)、山田 和彦(7期)

お問い合わせは、4期・池田 強（自宅住所/〒144 大田区仲六郷2-2-1、勤務先TEL/03-3528-0718）までお願いします。

平成 6 年度 収 支 決 算 書

支 出 の 部			収 入 の 部		
科 目	予算額	決算額	科 目	予算額	決算額
1. 事 業 費	3,170,000	3,196,158	1. 部 会 助 成 金	3,930,000	3,930,000
(1)会 報 発 行 費	1,150,000	1,188,658	2. 前年度繰越金	995,050	995,050
(2)学 部 だ よ り 配 布 費	170,000	182,001	3. 預 金 利 息	100,000	41,088
(3)同 期 会 等 助 成 費	150,000	60,000	4. 雑 収 入	400,000	356,000
(4)親 睦 会 費	1,000,000	1,122,056			
(5)大 学 ・ 学 生 と の 懇 談 会	250,000	299,663			
(6)学 友 会 助 成 費	250,000	200,000			
(7)就 職 ガ イ ダ ン ス 費	100,000	93,780			
(8)漁 船 海 難 遺 児 育 英 会 寄 付	100,000	50,000			
2. 運 営 ・ 管 理 費	1,810,000	1,620,404			
(1)印 刷 ・ 通 信 費	200,000	134,135			
(2)会 議 費	400,000	361,351			
(3)総 会 費	200,000	121,379			
(4)事 務 局 費	860,000	849,764			
(5)慶 弔 費	50,000	63,986			
(6)外 渉 費	100,000	89,789			
3. 予 備 費	445,050				
(1)予 備 費 支 出 金		200,000			
(2)次 期 繰 越 金		305,576			
合 計	5,425,050	5,322,138	合 計	5,425,050	5,322,138

《大学援助特別会計》

学友会助成のクラブ助成金の申請がなかったため、本特別会計に50,000円繰入れ。

平成 7 年 度 予 算

支 出 の 部		収 入 の 部	
科 目	予 算 額	科 目	予 算 額
1. 事 業 費	3,890,000	1. 部 会 助 成 金	4,635,000
(1)会 報 発 行 費	1,230,000	2. 前年度繰越金	305,576
(2)学 部 だ よ り 配 布 費	190,000	3. 預 金 利 息	50,000
(3)同 期 会 等 助 成 費	100,000	4. 雑 収 入	900,000
(4)親 睦 会 費	1,770,000		
(5)大 学 ・ 学 生 懇 談 会 費	250,000		
(6)学 友 会 助 成 費	200,000		
(7)就 職 ガ イ ダ ン ス 費	100,000		
(8)漁 船 海 難 遺 児 育 英 会 寄 付	50,000		
2. 運 営 費	1,810,000		
(1)印 刷 ・ 通 信 費	200,000		
(2)会 議 費	400,000		
(3)総 会 費	200,000		
(4)事 務 局 費	860,000		
(5)慶 弔 費	50,000		
(6)外 渉 費	100,000		
3. 予 備 費	190,567		
合 計	5,890,576	合 計	5,890,576